

いちぐう

## 一隅を照らす

新年、明けましておめでとうございます。ご信者ご一同が恙なく令和2年の新春をお迎えされたことを寿ぎ、お慶びを申し上げます。

今年は、令和4年の祖師ご降誕800年に向かう記念ご奉公の3年目です。ご信者それぞれが我が人生の最良の思い出となる、功德に満ちた一年を過ごすためには、お祖師さまが命を賭して教えられたご弘通の大事をよく理解して、皆がお教化に励むことが何より大切です。然しながら松風寺は、ここ十数年で最も状態が悪く、先輩方の祖師への記念ご奉公とは比較にならないほどお教化の成果が上がらずにいます。今年は心機一転し、その改善に心がけましょう。

ところで、この原稿を執筆中の今、かつて農林水産省の次官まで務めた熊澤英昭さんに、東京地裁が懲役6年の実刑判決を言い渡した報道が注目されています。理由はともかく、我が子を刺し殺す行為は絶対に許されません。ただ、日本を背負ったスーパーエリートが抱えた家庭内の苦悩に驚き、同情する論調も少なくないようです。これほど追い込まれるまで、周りは誰も気付かなかったことを、他人事で済ませない同じ悩みの方が、ずいぶんとあるのでしょうか。「八〇五〇問題」、つまり80代の親が50代のひきこもりの子どもを世話するケースが社会問題化しています。熊澤家の事件以降、日に一件程度だったひきこもりの相談が50~60件に増えたとの報道もありました。同じ苦悩を持つ人が、身近にいるかも知れません。

11月末の本山奉仕会では、各布教区から選抜されたお教務方に研修を受けていただきましたが、今回はその中で「京都いのちの電話」という社会福祉法人の事務局長、中瀬真弓さんに傾聴についての講習をいただきました。いのちの電話は自殺を踏み止まらず防波堤の活動です。電話の受け方、話の聞き方は文字通り命に関わります。その凄惨な現場の事例を交えつつ、「聞き上手」のポイントを学んだのですが、黙って聞くだけでは意味がなく、相手の話にどう応答し、対話を成立させるかに苦心して相談員が研修を重ねる様子に頭が下がりました。ちなみに京都だけで1か月に5万件の相談があるそうです。この数字にも、人知れず苦悩する人の多さを感じます。

お教化が昔のように出来なくなった理由に、時代の豊かさをあげる方がいます。昔のように本当に困っている人がいないので、お教化が難しい、と。確かに不景気とはいえ、我が国は豊かで医療環境も優れ、神仏に縋るほかに道はない、という人は昔ほどいないかもしれません。しかし、熊澤家の事件やいのちの電話の話を書く中で、「困っている人が本当にいないのだろうか」「御題目の救いが必要な人を、私たちが見えてないだけではないだろうか」とも感じるのです。

アフガニスタンの復興に長年尽された中村哲医師が凶弾に倒れ、簡単には真似出来ない尊い活動が改めて紹介されました。中村先生の座右の銘は、お祖師さまが尊敬された伝教大師の「一隅を照らす」という言葉だそうです。大きなことを成すよりも、「身近な社会の片隅を輝かす者こそ国の宝ぞ」と教えた法華の神髓を顕す言葉です。

(松風寺月報 令和2年正月号)